

## 田んぼの生物・文化多様性2030年プロジェクト始動

ラムネットJ共同代表 金井 裕

私たちラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ)は、2021年12月12日に小山市立中央公民館においてキックオフ集会を開催し、「田んぼの生物・文化多様性2030年プロジェクト」(略称：田んぼ2030プロジェクト)をスタートしました。このプロジェクトは、2010年に開催された生物多様性条約COP10で生物多様性保全の世界共通とされた愛知目標を田んぼで達成する「田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト」が、愛知目標の達成年である2020年に区切りを迎えたことから、新たに計画したものです。

「田んぼ2030プロジェクト」では、田んぼを取り巻く生きものたちは、稲作農業だけでなく地域の社会や文化も支えているということを明確にするとともに、愛知目標の後継となる生物多様性条約のポスト2020目標の実現への道筋を示すこととしました。ポスト2020目標は、この夏に開催予定の生物多様性条約COP15での採択に向けて、21の目標が検討中です。この21目標に対応した田んぼにおける生物多様性・生態系の保全・回復再生、消費者・都市市民との連携、政府・自治体による政策・支援制度の充実など22の水田目標2030(下表)を設定し、目標達成への行動内容も提案しています。詳しくは冊子「田んぼの生物・文化多様性2030年プロジェクト―水田目標2030」(https://fambol0.org/plan)をご覧ください。



冊子「田んぼの生物・文化多様性2030プロジェクト」表紙



田んぼ2030プロジェクト キックオフ集会(2021年12月12日、小山市)現地会場参加者

### ■ 水田目標2030 一覧 ■

水田目標	内容
T.1	流域の生物多様性の向上
T.2	田んぼの生態系の回復・再生と、未来への継承
T.3	田んぼの生物多様性を育む農業システムの管理下への組み込み
T.4	田んぼの生きもの保全・回復
T.5	田んぼの生きもの遺伝的多様性の保全・回復
T.6	人と生きものとの共生
T.7	田んぼの外来生物への対策
T.8	稲作による汚染・環境負荷の低減
T.9	田んぼを通じた気候変動対策
T.10	伝統的農法・水管理の再評価と田んぼの生きもの利用促進
T.11	田んぼによる災害被害の低減と回復
T.12	都市環境保全と田んぼとの連携
T.13	地域・風土に適應した品種の開発・保全
T.14	田んぼの生物多様性保全政策の実施
T.15	田んぼの生物多様性保全を推進する企業活動の発展
T.16	市民の価値観・行動の変革による生物多様性を育む農業の主流化
T.17	バイオテクノロジーによる悪影響への対処
T.18	生物多様性を育む農業に有害な補助金の削減・改善
T.19	生物多様性を育む農業支援の確保
T.20	生物多様性を育む農業への地域の伝統・知識・経験の活用
T.21	市民・NGOなどの政策・施策・事業など意思決定への参加の確保
T.22	国内外の組織・機関や団体との協働の推進

キックオフ集会では現地会場51名、オンライン27名の参加がありました。IUCN-Jの道家哲平氏から検討中のポスト2020目標と農業との関係について、国立環境研究所の西廣淳氏から気候変動や社会的な課題解決への田んぼの役割についての講演があり、そのあと参加者からの田んぼ2030プロジェクトへのメッセージをリレートークによりいただきました。集会の様子は田んぼ10年/2030プロジェクトのウェブサイト【報告】田んぼの生物・文化多様性2030プロジェクトキックオフ集会 <https://fambol0.org/archives/1319> からご覧いただけます。

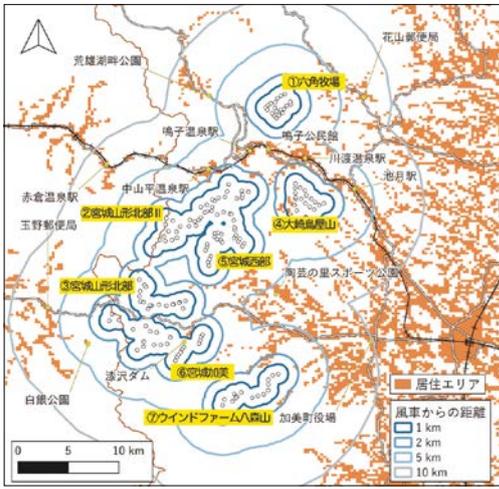
田んぼ2030プロジェクトは、参加登録いただいた方々と一緒に進めるプロジェクトです。ポスト2020目標の決定後には、田んぼ2030プロジェクトの具体化のためのワークショップを開催し、秋に開催予定のラムサール条約COP14の機会に国内外に発信したいと考えています。

田んぼを豊かな生物を育む湿地として未来につなげて行こうというのは、ラムネットJの設立の契機となったCOP10で採択された水田決議に基づく、ラムネットJの主要な活動のひとつです。田んぼ10年プロジェクトに登録いただいている方々には、継続していただくとともに、さらに多くの方々にご参加いただければと思います。

# 宮城県の鳴子温泉郷周辺に計画中の7つの大規模風力発電事業の問題点

日本雁を保護する会／ラムネットJ理事 吳地正行

温泉とこけしで知られる宮城県大崎市の鳴子温泉郷周辺で、4事業者による7つの大規模風力発電建設計画の進捗が進んでいます。この計画はさまざまな問題を孕んでいます。まず第一にその規模の大きいです。高さが200メートル級の風車が最多で約190基、総出力約65万キロワットという規模で、これらの大型風車が鳴子温泉を含む宮城、山形両県の3市3町にまたがる山々の稜線に林立することになります。その中には東北大学が放射性物質に汚染された牧場地をそのまま業者に貸し付けた計画も含まれています。このような大規模事業計画に対して、健康面、安全性、工事に伴う環境破壊と放射能汚染、渡り鳥のガン、ハクチョウ類などの衝突事故、および鳴子温泉郷の財産でもある美しい風景の破壊への不安が高まり



鳴子温泉郷周辺で、計画されている7つの大規模風力発電建設事業



宮城・鳴子温泉郷で計画が進む「(仮称)六角牧場風力発電事業」のイメージ図 (一般財団法人日本熊森協会作成・提供)

ました。そしてこの問題に取り組むために「鳴子温泉郷のくらしとこれからを考える会」(なるこれ会)が発足し、ラムネットJの構成団体で宮城県北部を拠点とするNPO田んぼと日本雁を保護する会もこれに加わり、問題解決をめざす活動に取り組んでいます。専門家や地元行政を招いての勉強会、地元議会への陳情を行い、2月16日には、全計画の白紙撤回を求める反対署名3095筆を村井嘉浩知事宛てに出しました。全国有数の温泉地に、降って湧いた大規模開発に対し、常連客から「鳴子の風景に癒やされてきた」「景観を壊さないで」といった声が相次いでいます。7計画のうち、最も大きな問題を抱えているのは、東北大学が所有する牧場に

建設される「六角牧場風力発電事業」です。ここには大きな2つの問題があります。一つは、この場所は2011年3月の東京電力福島第1原発の水素爆発事故で飛散した放射性物質に汚染し、牧場として使用できなくなった土地だということ。東北大学は牧場を除外せずに事業者へ貸し付け、そこに大型風車群が建設される計画であるということです。工事が始まれば、放射性物質が周辺地へ流出することを懸念する意見が、宮城県環境影響評価技術審査会で、放射性物質の専門家から出ています。国立大学が遊休地を大学業務と無関係の第三者へ貸し付けて収益を得ることは、2017年の法改正で認められるようになりました。放射線物質に汚染された土地を貸し付けた例はなく極めて異例と文部科学省も認めており、東北大学の大学人としての倫理観が厳しく問われる出来事です。



東北大学の六角牧場方向へ渡るガンの群れ (2022年3月5日、撮影: 富張菜々子)

もう一つは、ここがガン類の重要な渡りの経路になっていると

うことです。日本雁を保護する会などが企画し、鳴子の地元住民が中心となった渡りの市民調査を今年度継続して行いました。その結果、多数のガン類が渡りの時に風発のブレード(羽根)と衝突する高度で通過することがわかりました。その中には40年かけて絶滅からやっと復活した絶滅危惧種のシ

## 第12回ラムサール条約登録湿地関係市町村会議

2022年2月16日「ラムサール条約登録地関係市町村会議」第12回学習・交流会が開催されました。コロナ禍でなければ、事務局を担う栃木県において開催するところだったのでしたが、今年はZoomによるオンライン開催となりました。

オンラインとなったことで、場所を気にせずに参加ができたため参加率が上がったとのこと。PC画面上で確認した参加者数は35名でした。

市町村会議は、ラムサール条約に登録されている湿地およびその他の湿地の適正な管理に関し、市町村間の情報交換および協力を推進することにより、各地域の湿地保全活動を促進することを目的としています。他のラムサール条約締結国でも、このような横断的な自治体連携活動を毎年実施している例はなく、日本独特の活動となっています。

学習・交流会では、湿地のワイズユースのための連携を図り、活動を活性化することを目的に、自治体のほか、NPO、関係団体も

参加して相互に情報交換をする場を設けています。そのため、NPOであるラムネットJのメンバーも参加することができました。

まず始めに、今回の交流会のテーマである「コロナ禍のラムサール条約湿地での活動について」と題し、東京農工大学農学研究院教授の朝岡幸彦氏による話題提供が行われました。次に、市町村アンケート調査の集計結果が日本国際湿地保全連合(WIIJ)より報告されました。続いて、栃木市、鉦路市、大崎市の3自治体から取り組み報告がありました。休憩を挟んだ後、グループに分かれて「コロナ禍の影響・困ったこと」「効果があった活動・実施したい活動」について検討し、班ごとに発表を行いました。

最も印象的だった報告は、秋吉台の秋芳洞です。コロナ禍で閉洞したことで、これまで消したことがなかった洞内のライトを、一定期間、完全に消灯したことにより、洞内の水質や光の影響で繁茂する藻類などの洞内環境の重要なデータを収集することができたそうです。

# エフゲニー・シロエチコフスキーさんを悼む

ラムネットJ理事 柏木 実／呉地正行

東アジア・オーストラリア地域フ  
ライウェイパートナーシップのロシ  
ア政府代表、ヘラシギ特別委員会議  
長のエフゲニー・シロエチコフスキ  
ー博士がCOVID-19に感染、療  
養の間に癌のため1月25日、53歳  
の若さで亡くなりました。モスク  
ワ大学地理学部で学び、1990  
年代半ばから父上を引き継ぎ、ロ  
シア北極圏の鳥類踏査を率いてこ  
られました。国際的にはロシアの  
鳥類専門家として、また政府代表  
として二国間渡り鳥会議、北極評  
議会の作業部会議長など重責を果  
たしてこられました。何度も来日、  
各地でガン類やヘラシギなどに  
ついて講演会や小集会の講師もされ  
ました。大きな体と優しい眼をご  
存知の方も多いと思います。

2002年から経団連自然保護助  
成基金から助成を受け、ヘラシギ  
調査の初期の資金源となりました。  
研究さえできれば良いと、水鳥  
減少の主因に日本・韓国・中国で  
の開発の影響を挙げることをする  
研究者が多くいます。エフゲニー  
もそのような人かとも当初思いま  
した。しかし柏木が2002〜3  
年に実際にチュコト調査に参加し  
、またさまざまな保全活動を共にす  
る中で、鳥たちへのエフゲニーの愛  
を感じ取りました。彼は、チュコト  
の子どもたちにパチンコで鳥を撃  
つてはいけないと話し、鳥たちを  
守る方法を描かせる啓発活動  
を行ってきました。またチュコト政  
府へも働きかけてヘラシギ保護区  
実現に漕ぎつけるなど、真剣に保  
護活動を行ってきました。このよ  
うな研究者と一緒に活動できたこ  
とは本当に幸せだったと思います。

エフゲニーと遺された家族、ロ  
シアとウクライナ、そして世界の  
平和を切に望みます。



2015年1月ウトナイ湖で。EAAFP  
会議の前に

## 報告

# サンゴ礁ウィークオンラインイベント 2022年トークリレー

ラムネットJ事務局長 後藤尚味

サンゴ礁は世界的に危機に瀕している状態にあります。毎年3月5日のサンゴの日前後はサンゴ礁ウィークと呼ばれ、サンゴ礁保全にかかる活動が各地で行われます。ラムネットJでは3月10日に日本自然保護協会との共催によるオンラインでのトークリレーを、沖縄県サンゴ礁保全推進協議会とパタゴニア日本支社からの後援をいただいて開催しました。(参加者数62名)

琉球列島の石垣島、久米島、奄美大島瀬戸内町、泡瀬干潟(沖縄島)、恩納村(沖縄島)の4つの島、5つの現場をつなぎ話題提供をいただきました。

### ■「僕らの海の守りかた」ユニスク 内藤明さん

石垣島と西表島の間にある石西礁湖のサンゴ礁を守るために、地元の人を中核とした取り組みを実施。漂着した折れサンゴの移植、陸上から流出する赤土を防止するための植樹、ユース向けの体験型教育プログラム、そして、独自の技術とノウハウを駆使したイルカ・クジラの調査や流速・流量調査などを行っている。

### ■「久米島漁協のサンゴ礁保全の取り組みについて」久米島漁協 伊関ありささん

久米島の産業はマグロ漁、モズク養殖、

アサ養殖などが盛んだが、大雨の後など、大量の赤土が海へ流出し、海の生態系への影響が大きい。サンゴ再生のために漁協で部会を立ち上げ、モニタリングしながらサンゴ畑を育てている。地元の若者を対象に体験学習を提供。みんなが笑っていられる未来のために保全活動を続けていきたい。

### ■「瀬戸内町海を守る会の活動について」瀬戸内町海を守る会 祝 隆之さん

守る会はダイビング事業者から成り、ダイビングやスノーケリングの船がアンカーを下ろさないで済むように36か所の係留ブイを設置して、サンゴ礁の保全につなげている。2001年の安脚場沖のオニヒトデの大量発生以降、再生の過程をモニタリングしている。サンゴに絡まったロープ、漁網などゴミの撤去活動で集めたゴミ量は2トン車にいっぱいになる。ごみ処理費用は水産観光課が負担してくれている。

### ■「泡瀬干潟を次世代に継承する取り組みについて」沖縄国際大学 砂川かおりさん

泡瀬干潟は沖縄の東側の中城湾にあり、海草が豊かな場所であったが、人工島の建設により環境の変化が起こった。干潟を知ってもらうため、潮干狩りや伝統的



写真：小橋川共男

手法でタコ獲りなどを行っている。コアジサシの営巣地でもあり、観察会、成果の英語発信、デコイ・ワークショップなどを実施している。現在EAAFPへの参加を模索中。

### ■「恩納村のサンゴ礁保全の取り組みについて」沖縄ダイビングサービスLagoon 池野正一さん

サンゴの植え付けプログラムをダイビング体験の一貫として組み入れている。砂地に鉄筋を刺し、その先端にサンゴを植え付けて増やす(ひび建て式養殖)。参加者には、今サンゴ礁に何が起きているのかを学んでもらうことから始めている。国連グリーン・フィンズに準拠。

この記録動画はYoutubeでご覧いただけます。[https://youtu.be/y8s9uK\\_hlFA](https://youtu.be/y8s9uK_hlFA)

●世界湿地の日(日韓NGOの共同声明を発表)

ラムネットJでは2月2日の世界湿地の日、韓国湿地NGOネットワークと共同で「世界湿地の日」に全ての湿地の十全な保護を求める共同声明を発表しました。昨年12月に開催した日韓NGO湿地フォーラムで、日韓において重要な湿地やその周辺で開発行為が続いている状況を確認したことから、今回の声明では日韓両政府に対し、ポスト2020生物多様性枠組みに沿った湿地保全政策の実施などを求めています。声明文はラムネットJのウェブサイト (<http://www.ramnet-j.org/2022/02/information/5283.html>) に掲載しています。

●吉野川河口みらい講座

ラムネットJでは、とくしま自然観察の会との共催で「吉野川河口みらい講座」を連続して開催中です。これまで1月22日と3月12日にオンラインで実施し、南港ウェットランドグループの和田太一さんに吉野川河口における底生生物や渡り鳥の生息状況などについて解説していただきました。録画をYouTubeで公開していますので「吉野川河口みらい講座」で検索してご覧ください。5月に第3回の開催を予定しています。

●シンポジウム「宝の海を再び」

諫早湾干拓や有明海再生の問題をテーマにした日本環境会議主催のシンポジウムが、4月16日(土)13時30分から、福岡県弁護士会館2階大ホールで開催されます。オンラインでも視聴できます。参加登録フォーム: <https://bit.ly/3jiYd1> (短縮URL)

水のつながり、命のつながり。  
湿地のグリーンウェイブ2022開催!



「グリーンウェイブ」は生物多様性条約事務局の呼びかけによって生まれた生物多様性を向上させる国際的なキャンペーンです。この取り組みをあらゆる湿地で広げるために、ラムネットJでは毎年5月22日の「国際生物多様性の日」を中心に、「湿地のグリーンウェイブ」として独自に参加団体を募って湿地保全キャンペーンを展開しています。今年も「湿地のグリーンウェイブ2022」として、4月から8月にかけて、自然観察会、田植え、清掃活動、外来生物の駆除、学習会などの登録イベントが全国各地で実施されます。また、ラムネットJでは4月2日に湿地のグリーンウェイブ2022キックオフミーティングをオンラインで開催します(左欄参照)。

皆さまの近くの湿地で開催されるイベントにぜひご参加ください。なお、新型コロナウイルスの影響で、イベントを予定しにくい状況が続いていることから、昨年に続き今年のリーフレットも登録団体の活動紹介やラムサール条約に関する記事などを中心に掲載しています。各団体のイベントの詳細は湿地のグリーンウェイブのホームページ (<http://www.ramnet-j.org/gw/>) に随時、最新情報を掲載します。



湿地のグリーンウェイブ2022のリーフレット

### 湿地のグリーンウェイブ2022 キックオフミーティング

～今年もやっぱり湿地自慢～

湿地のグリーンウェイブ2022の開幕を告げるイベントをオンラインで開催します。ぜひご参加ください。

- 日 時：2022年4月2日(土) 18:00～20:00
- 参加方法：オンライン (Zoom)  
※要事前登録 (参加費無料)
- 参加登録：以下のウェブフォームよりお申し込みください。 <https://bit.ly/35MJGhW>
- プログラム
  - ・基調講演「世界湿地概況 (GWO) 2021と日本の湿地の現状(仮題)」講師：小林聡史氏 (釧路公立大学教授)
  - ・全国各地の湿地自慢：湿地のグリーンウェイブ2022登録団体による湿地や保全活動の紹介
- お問い合わせ：ラムネットJ info@ramnet-j.org

### 2022年度ラムネットJ会費納入のお願い

ラムネットJは4月から新年度となります。会員の皆さまには2022年度の年会費の納入をお願いします。会員種別ごとの金額、振込先などは下の入会案内にあります。会員の方にはこのニュースレターとともに郵便振替用紙(払込取扱票)をお送りしましたのでご利用ください。

## ラムサール・ネットワーク日本 会員募集!!

ラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ)の活動は、会員の皆様からの会費や、カンパ、助成金などでまかっています。ぜひ、ラムネットJのサポーター(一般賛助会員)になって会の活動を支援してください。もっと積極的に湿地保護にかかわりたい方は、会の運営や活動を担う一般正会員としての入会をお待ちしています。そのほか、団体や企業としての入会も可能です。詳しくは事務局までお問い合わせください。

### 会員の特典

機関誌「ラムネットJニュースレター」を送付するほか、会員限定のメーリングリストに参加できます。ラムネットJが主催する催しの参加費が割引になる場合もあります。

### 入会申込方法

- 郵便振替 郵便振替用紙(払込取扱票)の通信欄に、ご希望の会員種別、お名前、住所、電話番号、Eメールアドレスをご記入の上、年会費をお振り込みください。一般銀行から振り込む場合は(払込取扱票への記入ができませんので)振り込み後に上記の申込事項をEメール、FAX、郵便等で右記の事務局までお知らせください。
- ウェブサイト 一般賛助会員、一般正会員については、ウェブサイトからオンラインでの入会も可能です。 <http://www.ramnet-j.org/join/> にアクセスし、「入会申込フォーム」に記入して送信してください。年会費は郵便振替でご送金いただくか、ペイパルを使ってオンラインで決済することも可能です(クレジットカードも使用できます)。

### 振込先

ゆうちょ銀行 振替口座 00140-0-765702 ラムサール・ネットワーク日本 (一般銀行から) ゆうちょ銀行 〇一九(ゼロイチキョウ)店 当座預金 0765702 ラムサール ネットワークニホン

### 会員種別と入会申込金(年会費)

会員種別	正会員		賛助会員	
	総会での議決権があります		総会での議決権がありません	
一般	1口	5,000円	1口	2,000円
団体	1口	10,000円	1口	10,000円
特別	50,000円以上		30,000円以上	
企業	-		1口	100,000円

### 年会費(入会金)

年会費は毎年4月から翌年3月までの1年分です。入会初年度は、年度途中の入会でも入会金として1年分の会費をいただきます。2～3月に入会の場合、初年度の年会費(入会金)は無料となり、4月からの次年度の年会費としていただきます。

### 事務局

NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本  
〒110-0016 東京都台東区台東1-12-11  
青木ビル3F TEL/FAX 03-3834-6566  
Eメール info@ramnet-j.org